八戸小

考えを深める子の育成

～対話を通して主体的に学ぶ児童を育てる授業づくり～（２年計画の１年次）

校長　　小　林　　淳

１　研究主題について

⑴　教育目標具現化の立場から

本校の教育目標である「誇りをもち、主体的に生きる子」の育成に迫るために、努力目標の一つとして、「進んで学ぶ子」を掲げている。さらに、学校課題をふまえ、今年度の学校目標を「思いやりの心をもち　たがいに認め合い　学び合う子」と設定し、「思いやり、コミュニケーション力、対話力」を育成すべき資質能力とした。これを踏まえ、学習問題の設定の仕方を工夫し、話合いの場を効果的に設定することによって、学ぶ意欲や思考力の向上を目指したい。

⑵　これまでの実践から

児童の主体的に学ぼうとする意欲の向上や話合いを通して思考力を高めるという課題を踏まえ、令和２年度から「考えを深める子の育成」という主題で研究に取り組んできた。学習問題を設定する際に、子どもたちのつぶやきやつまずき、疑問などを取り上げたり、児童の思考の「ズレ」を意識させたりしたことで、解決する必要感をもたせ、問題解決への意欲が高まった。また、「話す聞くスキル」を掲示し、対話の仕方の指導に取り組んだことで、進んで対話活動に取り組む児童が増えてきた。しかし、話合い活動の中で、相手と自分の意見をつなぐ言葉をうまく使えていない児童や、活用していても十分に考えを深めているとはいえない児童も多くいた。

そこで今年度は、学習問題の設定の工夫や相手の話を受けて話す指導の工夫を取り入れた授業展開を行っていく。学習問題の設定では、児童の思考の「ズレ」を意識させて、解決しようとする意欲を高める工夫に引き続き取り組んでいく。また、話合い活動では、対話名人表を活用して話し方や聞き方の指導を行い、児童同士が考えを積極的に交流し考えを深めていき、「考えを深める子の育成」を目指したいと考えた。

２　研究のねらい

考えを深める子を育成するために、解決する必要感のある学習問題を設定し、児童が考えを交流し深めていくことが効果的であることを、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

⑴ 思考の「ズレ」を生かし、解決する必要感のある学習問題を設定することで、主体的に学び考えを深めようとする児童の意欲が高まるのではないか。

⑵ 対話の仕方を具体的に示し経験させることで、児童は考えを交流し深めていくことができるようになるのではないか。

４　研究内容

⑴ 学習問題の設定の工夫

ア　思考の「ズレ」を生かし、解決する必要感のある学習問題の設定の工夫をする

イ　本時の課題の提示や考えを共有する場面の工夫をする。

⑵ 考えをもち表現する力をつけさせるための土台づくり

ア　「対話名人表」を活用し、本時で活用する対話の仕方を示し経験させる。

イ　本時の振り返りをさせる。（対話、内容）

⑶ 話合いの指導や支援の工夫

ア　根拠をはっきりさせる話合い（既習事項や経験、図や資料など）

イ　話をつなぐ言葉を用いた話合い

ウ　教師のはたらきかけの工夫（板書、揺さぶり、発問、指示、切り返し等）

⑷研究の検証

ア　「対話名人表」での振り返りをもとに、児童ごとや学級全体の変容を見取る。（２か月ごと）

イ　考えが深まったかどうか、授業の中で児童が行う振り返りから変容を見取り、研究の日常化を図る。

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名・助言者	授業の概要（校内研究との関わり）
１０	１９	第１回授業研究（４学年） 「面積」（算数） 授業者　教諭　髙畑　和子	面積と周りの長さが関係するか、その予想と結果の「ズレ」を生かしたり、一番広い面積の図形はどれかを焦点化したりすることで、学習意欲が高まった。また、話合いの際に図や話をつなぐ言葉を使うことで相手意識をもって説明できた。
１１	２２	第２回授業研究（６学年） 「てこのはたらき」（理科） 授業者　教諭　当山　一希	前時の学習課題や生活場面との「ズレ」を生じさせることで、課題を解決したいという意欲が高まった。また、自分の考えを理由をつけて話させたり理解できなかった内容を聞き返したりさせることで、友達の方法を知りたいという意欲が高まり、考えを深めることにつながった。

⑵　一般研修

月	日	内容・講師等
5	２４	ノート指導と板書についての研修
6	１２	教科書調査
6	２８	プールの使用についての研修 （講師：八戸市立第二中学校　講師　大倉　理佳　先生　管理人　澁谷　泰治　氏）
7	２１	ＡＥＤ講習会（八戸消防署　署員４名）
8	２２	対話を取り入れた授業づくり （講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　畠山　洋一　先生）
9	２０	特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり （講師：八戸市教育委員会教育指導課　主任指導主事　青木　拓哉　先生）

６　研究の成果

⑴　課題設定の場面などで、思考の「ズレ」から問いをもたせ、課題を共有して授業を進めることによって、学習意欲が高まり、興味・関心をもって取り組むようにできることを検証することができた。

⑵　教師と児童が対話名人表の内容を共通理解して進めることができた。対話の仕方を示し経験させることで、対話に慣れ、つなぐ言葉をつかうことのできる児童が増えた。

⑶　授業や単元の終わりなどに書く振り返りでは、友達の意見でよいと思ったことや自分の成長を自覚する内容が書かれ、深まりが見られた。

７　研究の課題

⑴　対話名人表の項目を焦点化し、学年に合った目標や系統性を明らかにし、評価規準をはっきりさせて活用していく必要がある。

⑵　対話的な活動を継続することで、習得の段階から活用・応用に進化させること、また、その学習のあり方の工夫も課題である。

記入者（山道　恵里香）